

## 二世の契

泉鏡花作

一

眞中に一棟、小さき屋根の、恰も朝凧の海に難破  
船の傍のやう、且つ破れ且つ傾いて見ゆるのは、此  
の廣野を、久しい以前汽車が横切つた、其の時分の  
停車場の名残である。

路も纒に通ずるばかり、枯れても未だ葎の結ばれ  
た上へ、煙の如く降りかゝる小雨を透かして、遠く  
其の寂しい状を視めながら、

「もし、お媪さん、彼處までは何のくらゐありま  
す。」

と尋ねたのは效々しい獵装束。顔容勝れて清らか  
な少年で、土間へ草鞋穿の脚を投げて、英國政府が  
王冠章の刻印打つたる、ポネヒル二連發銃の、銃身  
は月の如く、銃孔は星の如きを、斜に古疊の上に差  
置いたが、恚う聞く中に、其の鳥打帽を搔取ると、  
零するほど額髪の黒く軟かに濡れたのを、幾度も拂

ひつゝ、太く野路の雨に惱んだ風情。

縁側もない破屋の、横に長いのを二室にした、古  
び曲んだ柱の根に、齡七十路に餘る一人の媪、絲を  
操つて車を、ぶう／＼、靜にぶう／＼。

「然うぢやの、もの十七八町もござらうぞ、さし渡  
しにしては澤山もござるまいが、人の歩行く路は廻  
り廻り廻つて居るで、半里の餘もござりましょ。」  
と首を引込め、又揺出すやうにして、舊停車場の方  
を見ながら言つた、媪がしよぼ／＼した目は、恚う  
やつて遠方のものに摺りつけるまでにしなれば、  
見えぬのであらう。

それから顔を上げ下しをする度に、恆は何處にか  
藏して置くらしい、がツくり窪んだ胸を、伸し且つ  
竦めるのであつた。

素直に伸びたのを其のまゝ撫でつけた白髪の其よ  
りも、尚多いのは膚の皺で、就中最も深く刻まれた  
のが、脊を低く、丁ど絲車を前に、枯野の末に、埴  
生の小屋など引くるめた置物同然に媪を疊み込んで  
置くのらしい。一度胸を伸して後へ反るやうにし  
た今の様子で見れば、瘡せさらばうた背丈、此の齡  
にしては些と高過ぎる位なもの、すツくと立つたら、

五六本細いのが、ある背戸の榛の樹立の他に、珍しい枯木に見えよう。肉は干び、皮萎びて見るかげもないが、手、胸などの巖乗さ、澁色に龜裂が入つて下塗の漆で固めたやう、未だ／＼目立つのは鼻筋の判然と通つて居る顔備と。

黒ずんだが鬱金の裏の附いた、はぎ／＼の、之はまた美しい、褪せては居るが色々、淺葱の麻の葉、鹿子の緋、國の習で百軒から切一ツづゝ集めて繼ぎ合す處がある、其のちゃん／＼を着て、前帯で坐つた形で。

彼の古戦場を過つて、矢叫の音を風に聞き、淺茅が原の月影に、古の都を忍ぶたぐひの、心ある人は、此の媼が六十年の昔を推して、世にも希なる、容色の上臈としても差支はないと思ふ、何となく犯し難き品位があつた。其の尖つた顚のあたりを、すら／＼と靡いて通る、綿の筋の幽に白きさへ、やがて霜になりさうな冷い雨。

少年は爐の上へ兩手を眞直に翳し、斜に媼の胸のあたりを窺うて、

「はあ其では、何か、他に通るものがあるんですか。」

媼おつなは見返りみかへもしないで、眞向正面まつかうしやうめんに渺々べうくたる荒野あれの

を控ひかへ、

「他にほか通とほるかとは、何がなにでござるの。」

「否いえ、今謂いまいつたぢやないか、人の通ひととほる路みちは廻まはり／＼  
蛭うねつて居あるつて。だから聞きくんですが、他にほか何かなに歩あ

行ゐきますか。」

「やれもう、こんな原はらぢやもの、お客様きやくさま、狐きつねも犬いぬも  
通とほりませいで。霧きりがかゝりや、歩あるかうづ、雲くもが下あり  
や、走はしらうづ、蜈蚣むかでも潜もくれば蝗いなごも飛とぶわいの、」と  
孫まごにものいふやう、顧かへりみて打微笑うちほゝえむ。

此の口からなら、譬ひ鬼が通る、魔が、と言つても、疑ふ處もなし、又然う信ずればとて驚くことはないのであつた。少年は姓桂木氏、東京なる某學校の秀才で、今年夏のはじめから一種憂鬱な病にかゝり、日を経るに従うて、色も、心も死灰の如く、やがて石碑の下に形なき祭を享けるばかりになつたが、其の病の原因はと、渠を能く知る友だちが密に言ふ、仔細あつて世を早うした戀なりし人の、其の姉君なる貴夫人より、一挺最新式の獵銃を賜はつた。が、爰に差置いた即是。

武器を參らす、郊外に獵などして、自ら勵まし給へ、聞くが如き其の容體は、薬も看護も效あらずと醫師のいへば。但御身に恙なきやう、わらはが手はいつも銃の口に、と心を籠めた手紙を添へて、兩三日以前に御使者到來。

凭りかゝつた胸の離れなかつた、机の傍にこれを受取ると、額に手を加ふること頃刻にして、桂木は猛然として立つたのである。

初今朝、此の邊からは煙も見えず、音も聞えぬ、  
新停車場で唯一人下り立つて、朝霧の濃やかな野中  
を歩して、雨になつた午の時過ぎ、媼の住居に駈け  
込んだまで、未だ嘗て一度も煙を銃身に絡めなかつ  
た。

桂木は其の病まざる前の性質に復したれば、貴夫  
人が情ある贈物に酬いるため――函嶺を越ゆる時汽  
車の中で逢つた同窓の學友に、何處へ、と問はれて、  
修善寺の方へ蜜月の旅と答へた――最愛なる新婚の  
婦、ポネヒル姫の第一發は、仇に田嶋山鳩の如きを  
打たず、願はくば目覺しき獲物を提げて、土産にし  
ようと思つたので。

時ならぬ洪水、不思議の風雨に、隙なく線路を損  
はれて、官線ならぬ鐵道は其の停車場を更へた位、  
殊に桂木の一家族に取つては、祖先、此の國を領し  
た時分から、？々易からぬ奇怪の歴史を有する、三  
里の荒野を跋涉して、目に見ゆるもの、手に立つも  
の、對手が人類の形でさへなかつたら、覺えの狙撃  
で射て取らうと言ふのであるから。

霧も雲も歩行くと語つた、仔細ありげな媼の言を  
物ともせず、暖めた手で、ぴツしよりの草鞋の紐を

と  
解きかける。

油断はしないが俯向いたまゝ、

「私は又不思議な物でも通るかと思つて慄然とした、お媼へ／＼ルビさん、此様な處に一人で居て、晝間だつて怖しくはないのですか。」

桂木は疾く媼の口の、炎でも吐けよかしと、然り氣なく誘ひかける。

媼は額の上に綿を引いて、

「何が恐しからうぞ、今時の若いお人にも似ぬことを言はつしやる、狼より雨漏が恐いと言ふわいの。」  
と又背を屈め、胸を張り、手でこするが如くにし、外の方を覗いたが、

「むかうへむく／＼と霧が出て、そつとして居る時は天氣ぢやがの、此方の方から雲が出て、そろそろ両方から歩行みよつて、一所になる時が此の雨ぢや。ぴしよ／＼降ると寒うござるで、老寄には何より恐しうござるわいの。」

「あゝ、私も雨には弱りました、じと／＼其處等中へ染込んで、この氣味の悪さと云つたらない、お媼

さん。」

「はい、御難儀でござつたる。」

「お邪魔ですが此處を借ります。」

桂木は足袋を脱ぎ、足の爪尖を取つて見たが、泥にも塗れず、綺麗だから、其のまゝ筵の上へ、ずいと腰を。

たとひ洗足を求めた處で、媪は水を汲んで呉れたか何うだか、根の生えた居ずまひで、例の仕事に餘念のなさ、小笹を風が渡るかと　　：音につれて積る白絲。

桂木は濡れた上衣を脱ぎ棄てた、カラアも外したが、爐の、ふちに尚油断なく、

「あゝ、腹が空いた。最う／＼降ると溜つたので濡れ徹つて、帽子から雫が垂れた時は、色も慾も無くなつて、筵が一枚ありや極樂、其處で寝たいと思つたけれど、恚うしてお世話になつて雨露が凌げると、今度は蟲が合點しない、何ぞ食べるものはありませんか。」

「然ればなう、恐し氣な音をさせて、汽車とやらが向うの草の中を走つた時分には、客も少々はござつたで、瓜など剥いて進ぜたけれど、見さつしやる通りぢやでなう。私が食べる分ばかり、其も黍を焚いたのぢやほどに、逆もお口には合ふまいぞ。」

「否、飯は持つてます、何うせ、人里のないを承知だつたから、竹包にして兵糧は持参ですが、お菜にするものがないんです、何か些と分けて貰ひたいと思ふんだがね。」

媪は胸を折つてゆるやかに打頷き、  
「それならば待たしやませ、鹽ツばいが味噌漬の香

の物がござるわいなう。」

「待ちたまへ、味噌漬なら敢てお手數に及ぶまいと思ひます。」

と手易く笹の葉を解くと、硬いのがしやつちこばる、包の端を壓へて、草臥れた兩手をつき、畏つて熟と見て、

「それ、言はないこつちやない、果して此の菜も味噌漬だ。お媪、ルビさん、大きな野だの、奥山へ入るには、梅干を持たぬものだつて、宿の者が言つたつけ、然うなかね、」と顔を上げて又瞻つたが、恚る相好の媪を見たのは、場末の寄席の寂として客が唯二三の時、片隅に猫を抱いてしよんぼり坐つて居たのと、山の中で、薪を背負つて歩行いて居たのと、これで三人目だと桂木は思ひ出した。

媪は皺だらけの面の皺も動かさず、

「何うござらうぞ、食べて悪いことはなからうがや、野山の人はも、一層のこと霧の毒を消すものぢやといふげにござる。」

「然う、」とばかり見詰めて居た。

此時氣だるさうにはじめて振向き、

「あのまた霧の毒といふものは恐いものでなう、お

前様、今日は彼が雨になつたればこそ可うござつた、ものゝ半日も冥土のやうな煙の中に包まれて居て見やしやれ、生命を取られいだから三月四月煩うげな、此處の霧は又格別ぢやと言ふわいなう。」

「あの、霧が、」

「お客様、お前さま、はじめて此處を歩行かつしやるや？」

桂木は大膽に、一口食べかけたのをぐツと呑込み、  
「はじめてだとも。聞いちや居ただけれど。」

「然うぢやろ、然うぢやろ。」と媪はまた頷いたが、  
單然うであらうではなく、正に然うなくてはかなはぬと言つたやうな語氣であつた。

「而して何かの、お前様其の鐵砲を打つて歩行かするでござるかの。」と絲を探る手を兩方に開いて  
じつと、此の媪の目は、怪しく光つた如くに思はれたから、桂木は箸を置き、心で身構をして、

「これかね。」と言ふをきツかけに、ずらして取つて引寄せた、空の模様、小雨の色、孤家の裡も、媪の姿も、さては爐の中の火さへ淡く、凡て枯野に描かれた、幻の如き間に、ポネヒル連發銃の銃身のみ、

青く閃くまで磨ける鏡かと壁を射て、弾込したのが  
づつしり手應。

我ながら頼母しく、

「何、まあね、何うぞこれを打つことのないやうに  
と、内々祈つて居るんだよ。」

「其はまた何といふわけでござらうの。」と澄して、  
例の糸を繰る、五體は悉皆、車の仕かけで、人形の  
動くやう、媼は少頃も手を休めず。

驚破といふ時、綿の條を射切つたら、胸に不及、  
咽喉に不及、玉の緒は絶えて媼は唯一個、朽木の像  
にならうも知れぬ。  
と桂木は心の裡。

4

#### 四

構はず兵糧を使ひつゝ、

「だつてお媼、ルビさん、此の野原は滅多に人の  
通らない處だつて聞いたからさ。」

「そりや最う眺望というても池一つあるぢやござら

ぬ、纒ばかりの違でなう、三島はお富士山の名所ぢやに、此處は恚う一目千里の原なれど、何が邪魔をするか見えませぬ、其れぢやもの、ものずきに来る人は無いのぢやわいなう。」

「否さ、景色がよくないから遊山に来ぬの、便利が悪から旅の者が通行せぬのと、そんなつい通りのことぢやなくさ、私たちが聞いたのでは、此の野中へ入ることを、俗に身を投げると言ひ傳へて、無事にや歸られないんださうではないか。」

「それはお客様、此處といふ限はござるまいがなう、躓けば轉びもせうづ、轉びやうが悪ければ怪我もせうづ、打處が悪ければ死にもせうづ、野でも山でも海でも川でも同じことござるわ、なう、其につけても、然う又人のいふ處へ、お前様何をしに来さつしやつた。」

じろりと流盼に見ていった。

桂木はぎよつとしたが、

「理窟を聞くんぢやありません、私ハね、實はお前さんのやうな人に逢つて、何か變つた話をして貰はう、見られるものなら見ようと思つて、遙々出向いて來たんだもの。人間の他に歩行くものがあるとい

ふから、扱さてこそと乗のつかゝりや、霧きりや雲くもの動うごくこと  
になつて了しまふし、活いかしちや返かへさぬやうな者ものが住すん  
でゝも居あるやうに聞きいたから、其それを尋たづねりや、怪け我が  
過やまち失ところは所ところを定さだめないといふし、それぢや些ちつとも張はりあひ合あ  
がありやしない、何なにか珍めづしいことを話はなしてくれませ  
んか、私わたしはね。」

膝ひざを進すすめて、瞳ひとみを据すゑ、

「私わたしはね、お媪ばあへ／＼ルビさん、風説うはさを知しりつゝ恚かう  
やつて一人ひとりで來きた位くらいだから、打明うちあけて云いひます、見み  
受うけた處ところ、君きみは何なんだ、様やう子が宛然まるで野のの主ぬしでもいふ  
べきぢやないか、何なんの馬鹿ばか々々／＼、思おもふだらうが、  
好ものずき事ことです、何どうぞ一いっ番ばん構かまはず云いつて聞きかしてくれ  
給たまへな。」

恚かういふと何なにかお妖ばけの催さいそく促そくをするやうでをかしい  
けれど、焦じれツたくツて堪たまらない。

素もとより其そのつもりぢや來きたけれど、私わたしだつて、こ  
れ當世たうせいの若わかい者もの、はじめから何なに、人ひとの命いのちを取とるたつ  
て、野のに居ある毒蟲どくむしか、函嶺はしねを追おはれた狼おほかみだらう、今いま  
時詰ときつまらない妖ばけもの者ものが居あてなれますか、されども野の伏ぶせり

山賊の類で、もあらうかと思つて來たんです。霧が毒だつたり、怪我過失だつたり、心の迷ぐらゐなことは實は此方から言ひたかつた。其をあつちこつちに、お前さんの口から聞かうとは思はなかつた。其の癖、此方はお媪へルビさん、お前さんの姿を見てから、却つて些と自分の意見が違つて來て、成程これぢや怪しいことのないとも限らぬか、と考へてる位なんだ。

お聞きなさい、私が縁續きの人はね、商人で此の節は立派に暮して居るけれど、若いうち一時困つたことがあつて、瀬戸のしけものを背負つて、方々國々を賣つて歩いて、此の野に行暮れて、其の時草茫茫とした中に、五六本樹立のあるのを目當に、一軒家へ辿り着いて、臺所口から、用を聞きながら、旅に難澁の次第を話して、一晚泊めて貰ふとね、快く宿をしてくれて、何うして、行暮れた旅商人如きを、待遇すやうなものではない、銚子杯が出る始末、少い女中が二人まで給仕について、寝るにも紅裏の絹布の夜具、枕頭で住い薫の香を焚く。容易ならぬ譯さ、せめて一生に一晩は、恁ういふ身の上にと、其の時分は思つた、其の通つたもんだから、夢なら

覺めるなと一一夜明かした迄は可かつたさうだが。

翌日になると歸さない、其晩女中が云ふには、

お奥で館が召しますつさ。

其の人は今でも話すがね、館といったのは、其は何うも何とも氣高い美しい婦人ださうだ。しかし何分生膽を取られるか、薬の中へ練込まれさうで、恐さが先に立つて、片時も目を瞑るわけには行かなかつた。

私が縁續きの其の人はね、親類うちでも評判の美男だつたのです。」

## 五

桂木は伸びて手首を蔽はんとする、襯衣の袖を捲き上げたが、手も白く、戦を挑むやうではない優しやかなものであつた、けれども、世に力あるは、却つて恠る少年の意を決した時であらう。

「さあ、館の心に従ふまでは、村へも里へも歸さぬといつたが、別に座敷牢へ入れるでもなし、木戸の扉も葎を分けて、ぎいと開け、障子も雨戸も開放して、眞晝間、此の野を抜けて歸らるゝものなら、勝手に歸つて御覧なさいと、然も輕蔑をしたやうに、あは、あは笑ふと兩方の縁へふたつに別れて、二人の其の侍女が、廊下づたひに引込むと、あとはがらんとして疊數十五疊も敷けようといふ、廣い座敷に唯一人。」

折から爐の底にしよんぼりとする、掬ふやうにして手づから燻した落葉の中に二枚ばかり荊の葉の太く濕つたのがいぶり出した、胸のあたりへ煙が弱く、いつも勢よくは焚かぬさうで冷い灰を、舐めるやうにして、一ツ蛭つて這ひ上るのを、肩で亂して拂ひながら、

「煙い。其までは宛然恚う、身體へ絡つて、肩を包むやうにして、侍女の手だの、袖だの、裾だの、屏風だの、襖だの、蒲團だの、膳だの、枕だのが、あの、所狭うまでといふ風であつたのが、不残ずツと引込んで、座敷の隅々へ片着いて、右も左も見通しに、開放しの野原も急に廣くなつたやうに思はれたと言ひます。

然うすると、急に秋風が身に染みて、其の男はふる／＼と震へ出したさうだがね、寂閑として人ツ兒一人居さうにもない。

夢が現かと思ふ位。

桂木は語りながら、自ら其の境遇に在る如く。目を瞑つて耳を澄して居ると、二重、三重、四重ぐらゐ、壁越に、琴の絲に風が渡つて揺れるやうな音で、細く、ひゆう／＼と、お媪さん、今お前さんが言つてる其の絲車だ。

此の爐を一ツ、恚うして爰で聞いて居てさへ遠い處に聞えるが、其音が、幽にしたとね。

其時 茫乎と思ひ出したのは、昨夜の其の、奥方

だか、姫様だか、それとも御新姐だか、魔だか、鬼だか、お閨へ召しました一件のお館だが、當座は唯赫と取逆上て、四邊のものは唯曇つた硝子を透かして、目に映つたまでの事だつたさうだけれど。

緋の袴を穿いても居なけりや、搔取を着ても居ない、たゞ、輝々した蒔繪ものが揃つて、あたりは神々しかつた。狭い一室に、束髪たばねがみの引かけ帯で、ふつくりした美しい女が、絲車いとくるまを廻して居たが、燭臺しよくたいにつけた臘燭らふそくの灯影ほかげに、横顔よこがほで、旅商人たびあきうど、私の其の縁續えんつづきの美男びなんを見向みむいて、（主ぬしのあるものですが、一所しよに死しんで下くださいませんか。）——と唯一たつ言こといつたのださうだ。

いや、最もう六十むそになるが忘わすれないとさ、此この人は又また然さういふよ、其それから此方このかた、都みやこにも鄙ひなにも、其それだけの美び女ぢよを見みないツて。

さあ、其その絲車いとくるまのまはる音おとを聞きくと、白しろい柔やわかな手てを動うごかすまで目めに見みえるやうで、其そのまゝ氣きの遠とほくなる、其そが、やがて死しぬ心持こころもちに違ちがひがなければ、鬼おにでも構かまはないと思おもつたけれども、何どうも未いまだ浮世うきよに未練みれんがあつたから、這はふやうにして、聲音あしおとを盗ぬすんで出いで、脚絆きやはんを附つけて草鞋わらぢを穿はくまで、誰だれも遮さへぎる者もの

はなかつたさうだけれど、それが又、敵の圍を蹴散らして遁げるより、工合が悪い。

歸らるゝなら歸つて見ると、女どもが云つた呪詛のやうな言も凄し、一足棟を離れるが最後、岸破と野が落ちて地の底へ沈まうも知れずと、爪立足で、ぴく／＼しながら、それから一生懸命に、野路にかゝつて遁げ出した、伊豆の伊東へ出る間道で、此處を放れたまで何の障りもなかつたさうで。

たゞ、些と時節が早かつたと見えて、三島の山々から一なだれの茅萱が丈より高い中から、ごそ／＼と彼處此處、野馬が顔を出して人珍しげに覗めては、何處へか隠れて了ふのと、蒼空だつたが、ちぎれ／＼に雲の脚の疾いのが、何んな變事でも起らうかと思はれて、活きた心地はなかつたと言ふ話ぢやないか。

それだもの、お媼さん。」

「もし、そんなことが、眞個ほんたうにある處ところなら、生命いのちが  
 けだつてねえ、一ひと度ど來きて見みずには居ゐられないとは  
 思おもひませんか。

何なにしに來きたつて、お前まへさんが咎とがめるやうに聞きくか  
 ら言いふんだが、何なにも其その何どうしよう、恚かうしようとい  
 ふ惡氣わるきはない。

好ものずき事ずきさ、好ものずき事ずきで、變かはつた話はなしでもあつたら聞きかう、  
 不ふ思し議ぎなことでもあるなら見みようと思おもふばかり、し  
 かしね、其そを見み聞きくにつけては、どんな又また對あ手てに不ふ  
 心こころえ得えがあつて、危けん險のんでないとも限かぎらぬから、其そ處こで  
 恚かう、用よう心しんの銃じゅうをかついで、食たべる物ものも用よう意いした。

臺だい場ばの停ステイ車ション場ンから半はん道みちばかり、今こん朝てう此この原はらへかゝつ  
 た時ときは、脚きゃはん絆はんの紐ひもも緊しつかり乎なりと、草わらぢ鞋ぞうりもさツノと新あたらし  
 い踏ふみ心こころ地ち、一めん面めんに霧きりのかゝつたのも、味み方かたの狼のろし煙のろしの  
 やうに勇いさましく踏ふみ込こむと、さあ、一いつツ一いつツ、萱かやにも尾おぼ  
 花なにも心こころを置おいて、葉は末すえに目めをつけ、根ねを窺うかがひ、ま  
 るで、美うつくしい葦あしでも搜さがす形かたち。葉はずれの音おとがざはノ  
 くと、風かぜが吹ふく度たびに、遠とほくの方ほうで、

(主あるものですが、)とでも囁いて居るやうで、  
頼母しいにつけても、觸體の形をした石塊でもない  
か、今にも馬の顔が出はしないかと、寶の蔓でも手  
繰る氣で、茅萱の中の細路を、胸騒がしながら歩  
行いたけれども、不思議なものは樹の根にも出會さ  
ない、唯、彼のこはれ／＼の停車場のあとへ來た時、  
雨露に曝された十字の里程標が、枯草の中に、横に  
なつて居るのを見て、何となく荒野の中の礫柱で、  
もあるやうに思つた。

おゝ、然ういへば澤山古い昔ではない、此の國の  
歴々が、此處に鷹狩をして歸りがけ、秋草の中に立  
つて居た媚かしい婦人の、あまりの美しさに、豫て  
の色好み、うつかり見惚れるはずみに鞍を外して落  
馬した、打處が病のもとで、あの婦人ともを為せる、  
と言ひ死に亡くなられた。

あとでは魔法づかひだ、主殺しと、可哀相に、此  
の原で礫にしたとかいふ。  
日本一の無法な奴等、かた／＼殿様のお伽なればと  
言つて、綾錦の粧をさせ、白足袋まで穿かせた上、

犠牲に上げたとやら。

南無三寶、此の柱へ血が垂れるのが序開きかと、  
其十字の里程標の白骨のやうなを見て居る中に、  
凭かゝつて居た停車場の朽ちた柱が、風もないに、  
身體の壓で動くから、鐵砲を取直しながら後退りに  
其處を出た。

雨は其の時から降り出して、それからの難儀さ。小  
糠雨の細いのが、衣服の上から毛穴を徹して、骨に  
染むやうで、天窓は重くなる、草鞋は切れる、疲勞  
は出る、雫は垂る、あゝ、新しい筵があつたら、棺  
の中へでも寝たいと思つた、其で此の家を見つけた  
んだもの、何の考へもなしに駈け込んだが、一呼吸  
して見ると、何うだらう。」

爐の火は。ハツと炎尖を立てゝ、赤く媪の額を射た、  
瞻らるゝは白髪である、其皺である、目鼻立である、  
手の動くのである、絲車の廻るのである。恚くて  
も依然として胸を折つて、唯絲に繰らるゝ如き、媪  
の状を見るにつけても、桂木は膝を立てゝ屹となつ  
た。

「失禮だが、お媪へノルビさん、場所は場所だし、  
未枯だし、雨は降る、普通ものとは思へないぢやな

いか。霧が雲がと押問答、謎のかけツこ見たやうな  
ことをして居るのは、最う焦れつたくつて我慢が出  
来ぬ。そんなまだるつこい、氣の滅入る、絲車な  
んざ横倒しにして、面白いことを聞かしておくれ。  
それとも人が来たのが煩くツて、癩に障つたら、さ  
あ、手取り早く何うにかするんだ、牙にかけると、  
炎を吐くなり、然うすりや叶はないまでも抵抗しよ  
う、善にも悪にも恚うして居ちや、じわ／＼して胸  
が苦しい、じみ／＼雨で弱らせるのは、  
第一何にしる卑怯の到りだ、さあ、さあ、人間でさ  
いなくなりや、其を合圖で勝負にしよう、」と微  
笑を泛べて串戯らしく、身悶をして迫りながら、桂  
木の瞳は据つた。

血氣に逸る少年の、其の無邪氣さを愛する如く、  
離れては居るが顔と顔、媪は嘗めるやうにして、し  
よば／＼と目を？き、

「お客様もう降つて居はせぬがなう。」

桂木一驚を喫して、

「や何時の間に、」

## 七

「爐の中の荊の葉が、かち／＼と鳴つて燃えると、  
雨は上るわいなう。」

いかにも拭つたやうに野面一面。媪の頭は白さを  
増したが、桂木の膝のあたりに薄日が射した、但件  
の停車場に磁石を向けると、一直線の北に當る、日  
金山、鶴巻山、十國峠を頂いた、三島の連山の裾が  
直に枯草に交るあたり、一帯の霧が細流のやうに靨  
黴いて、空も野も幻の中に、一際濃やかに残るので  
ある。あはれ座右のポネヒル一度聲を發するを、  
彼處に人ありて遙に見よ、此處に恰も其の霧の如く、  
怪しき煙が立たうもの、と、桂木は心も勇んで、  
「むゝ、雨は歇んだ、けれどもお媪へ／＼ルビさんの  
姿は未だ矢張人間だよ。」と物狂はしく固睡を飲ん  
だ。

此の時媪、呵々と達者に笑ひ、

「はゝはゝ、お客様も餘程のお方ぢやなう、しつか  
りさつしやれ、氣分が悪いのでござる。なるほど石  
ころ一つ、草の葉にまで、心を置いたと謂はつしや  
るにつけ、何うかしてござらうに、まづ／＼、横に

でもなつて氣を落着けるが可いわいなう、それぢやが、私を早や矢張怪しいものぢやと思つてござつては、何とも安堵出來悪かる、可いわいの。もつともぢや、お主さへ命がけで入つてござつたといふ處、私がやうな起居も不自由な老寄が一人居ては、怪しうないことはなからうわいの、それぢやけど、聞かつしやれ、姨捨山というて、年寄を棄てた名所さへある世の中ぢや、私が世を棄て一人住んで居つたというて、何で怪しう思はしやる。

少い世拾人な、これ、坊さまも澤山あるではないかいの、まだノ、死んだ者に信女や、大姉居士なぞいうて、名をつける習でござらうが、何で又、其の旅商人に婦人が懸想したことを、不思議ぢやと謂はつしやる、やあ！」と胸を伸して、皺だらけの大な手を、薄いよれノ、膝の上。はしめて片手を休めたが、それさへ輪を廻す一方のみ、左手は尚細長い綿から絲を吐かせたまゝ、乳のあたりに捧げて居た。「第一まあ、先刻から恚うやつて鐵砲を持つた者が入つて來たのに、絲を繰る手を下にも置かない、茶

を一つ汲んで呉れず、焚火だつて私の方でして居るもの、變にも思はうぢやないか、えゝ、お媪さん。」

「これは／＼、お前様は、何と、働きもの、愛想のないものを、變化ぢやと思はつしやるか。」

「むゝ。」

「それも愛想がないのぢやないわいなう、お前様は可愛らしいお方ぢやでの、私も内端のもてなしぢや、茶も汲んで飲らうぞ、火も焚いて當らつしやらうぞ。何とそれでも怪しいかいなう。」

「桂木は返す言は出なかつたが、慥う謂はるれば謂はれるほど、却つて怪しさが増すのであつたが。」

爰にいたりて自然の勢、最早與みし易からぬやうに覺ゆると同時に、肩も疎み、膝もしまるばかり、烈しく恐怖の念が起つて、單に頼むポネヒルの銃口に宿つた星の影も、消えたかと怯れが生じて、連も敵し難しと、斷念をするとゝもに、張詰めた氣も弛み、心も挫けて、一齊にがつくりと疲勞が出た。初陣の此の若武者、霧に打たれ、雨に悩み、妖婆のためを取つて伏せられ、忍の緒をプツゝり切つて、

「最<sup>も</sup>う何<sup>ど</sup>うでも可<sup>よ</sup>うございます、私<sup>わたし</sup>はふら／＼して堪<sup>たま</sup>らない、殺<sup>ころ</sup>されても可<sup>い</sup>いから少<sup>しば</sup>時<sup>じ</sup>爰<sup>こゝ</sup>で横<sup>よこ</sup>になりた  
い、構<sup>かま</sup>わないかね、御<sup>ご</sup>免<sup>めん</sup>なさいよ。」

「おう／＼可<sup>い</sup>ともなう、安<sup>あん</sup>心<sup>しん</sup>して一<sup>やす</sup>休<sup>やす</sup>み休<sup>やす</sup>まつし  
やれ、ちツとも憂<sup>きう</sup>慮<sup>かひ</sup>をさつしやることはないに、私<sup>わたし</sup>  
が山<sup>やま</sup>猫<sup>ねこ</sup>の化<sup>ば</sup>けたのでも。」

「え。」

「はて魔<sup>ま</sup>の者<sup>もの</sup>にした處<sup>ところ</sup>が、鬼<sup>き</sup>神<sup>しん</sup>に横<sup>わう</sup>道<sup>だう</sup>はないといふ、  
さあ／＼かたげて寝<sup>やす</sup>まつしやれいの／＼。」

桂<sup>かつら</sup>木<sup>ぎ</sup>はいふがまゝに、兎<sup>と</sup>も角<sup>かく</sup>も横<sup>よこ</sup>になつた、引<sup>ひ</sup>寄<sup>きよ</sup>せ  
もせず、ポネヒル銃<sup>じゆう</sup>のある處<sup>ところ</sup>へ轉<sup>ころ</sup>げざまに、倒<sup>たふ</sup>れて  
寝<sup>ね</sup>ようとすると、

「や、しばらく待<sup>ま</sup>たつしやれ。」

「お前様一枚脱いでなり、濡れたあとで寒うござる。」

「震へるやうです、全く。」

「掛けるものを貸して進ぜましょ、失張内端ぢや、

お前様立つて取らつしやれ、何なう、私がなう、ありやうは此の絲の手を放すと事ぢや、一寸でも此の絲を切るが最後、お前様の身が危いで、いゝや、いゝ

や、案じさつしやるないの。又た不思議がらつしやるが、目に見えぬで、どないな事があらうも知れぬが世間の習ぢや。よりもかゝらず、蜘蛛の絲より弱うても、私が居るから可いわいの、さあゝ立つて取らつしやれ、被けるものは、他にない、あつても氣味が悪からうづ、少い人には丁度持つて来い、枯野に似合ぬ美しい色のあるものを貸しませうぞ。

あゝ、いや、其の蓑ではないぞの、屏風を退けて、其の蓑を取つて見やしやれいなう。」と絲車の前をずりもせず、頭ばかり振向く方。

桂木は、古びた雨漏だらけの壁に向つて、衝と立つた、唯見れば一領、古蓑が描ける墨繪の瀧の如く、

梁に掛つて居たが、見てはじめ、人の身體に着るの  
ではなく、雨露を凌ぐため、破家に絡うて置くのか  
と思つた。

蜂の巢のやう穴だらけで、爐の煙は幾條にもなつ  
て此處からも潜つて壁の外へ染み出す、破屏風を取  
のけて、さら／＼と手に觸れると、蓑はすつぱりと  
梁を放れる。

下に、絶壁の礮？たる如く、壁に雨漏の線が入つ  
た處に、すなりとかゝつた、目覺るばかり色好き衣、  
恁る住居に似合ない餘りの思ひがけなさに、媼の通  
力、枯野忽ち深山に變じて、こゝに蓑の瀧、壁の巖、  
もみぢの錦かと思つたので。

桂木は目を？つて、

「お媼さん。」

「おゝ、其ぢや、何とすどよからうがの、取つて搔  
巻にさつしやれいなう。」蓑は疊につくはかり、細  
く褌を引合せた、兩袖をだらりと、固より空蟬の殻  
なれば、咽喉もなく肩もない、襟を掛けて裏返しに  
下げてある、衣紋は梁の上に日の通さぬ、薄暗い中  
に振仰いで見るばかりの、丈長き女の衣、低い天井  
から桂木の背を覗いて、薄煙の立迷ふ中に、一本の

をみなへし 女郎花、枯野にイんで淋しさう、然も何となく活々  
して、扱帯一筋纏うたら、裾も捌かず、手足もなく、  
おもかけ 佛のみがすら／＼と、爐の縁を傳ふであらう、と桂  
木は思はず退つた。

「大事ない／＼、袷ぢやけれど、濡れた上衣よりは増でござるわいの、主も分つてある、麗な娘のぢやで、お前様に殆ど可いわ、其主もまたの、お前様のやうな、少い綺麗な人と寝たら本望ぢやる、はゝはゝはゝ。」

腹藏なく大笑をするので、桂木は氣を取直して、密と先づ其の袂の端に手を觸れた。途端に指の尖を氷のやうな針で鋭く刺さうと、天窓から冷りとしたが、小袖はしつとりと手にこたへた、取り外し、小脇に抱く、裏が上になり、膝のあたり和かに、棲しとやかに袷の裾なよ／＼と疊に敷いて、襟は仰向けに、譬ば胸を反らすやうにして、桂木の腕にかゝつたのである。

さて見れば、鼠縮緬の裾廻、二枚袷の下着と覺しく、薄兼房よろけ縞のお召縮緬、胴扱は絞つたやうな緋の龍巻、霜に夕日の色染めたる、胴裏の紅冷く翻つて、引けば切れさうに振が開いて、媪が若き

時ときの名残なごりとは見みえず、當世たうせいの色いろあざやかに、今脱いまぬいだかと媚なまめかしい。

熟ぢつと見みるうちに我われにもあらず、懷なつかしく、床ゆかしく、いとしらしく、殊ことにあはれさが身みに染しみて、まゝま、ころりと寝ねて襟えりのあたりまで、銃じゅうを枕まくらに引ひかぶる氣きになつた、ものゝ情なさけを知るものゝ、恚かくて妖魔えうまの術じゆつち中ちゆうに陥おちらうとは、いつとはなしに思おもひ思おもはず。

「はゝはゝ、見れば見るほど良い孫ぢやわいなう、何うぢや、少しは落着かしやつたか、安堵して休まつしやれ。したがの、長いことはならぬぞや、疲労が治つたら、早く歸らつしやれ。お前さま先刻のほど、血相をかへて謂はしつた、何か珍しいことでもあらうかと、生命がけでござつたとの。良いにつけ、悪いにつけ、此處等人の來ぬ土地へ、珍しいお客様ぢや。」

私かの、然うやつてござるあびだ、お伽に土産話を聞かせましょ。」

と下にも置かず兩の手で、靜に絲を繰りながら、  
「他の事ではないがの、今かけてござる其の下着ぢや。」

桂木は何時かうつら／＼して居たが、ばつちりと涼い目を開けた。

「其は恁うぢやよ、一月の餘も前ぢやわいの、何もつひぞ見たことのない、都風俗の、少い美しい嬢様が、唯だ一人景色を見い／＼、此の野へござつて

私が處へ休ましやつたが、此の奥にの、何とも名の  
知れぬ古い杜がござるわいの、其處へお參詣に行く  
といはつしやる。

はて此の野は其のお宮の主の持物で、何をさつし  
やるも其の御心ぢや、聞かつしやれ。

どんな願事でもかなふけれど、其かはり生命を  
犠にせねばならぬ掟ぢやわいなう、何と又世の中に、  
生命が要らぬといふ願があるか、措かつしやれ、お  
嬢様、御存じないか、というたれば。

いえ／＼大事ござんせぬ、其を承知で参りました、  
といはつしやるわいの。

いや最う、何も彼も御存じで、婆なぞが兎や角う  
いふも恐多いやうな御人品ぢや、さやうならば行つ  
てござらつせえまし。お出かけなさる時に、歩行い  
たせぬか暑うてならぬ、これを脱いで行きますと、  
其處で帯を解かつしやつて、お脱ぎなされた。支度  
を直して、長襦袢の上へ袷一ツ、身輕になつて、す  
ら／＼草の中を行かつしやる、艶々としたおつむり  
が、薄の中へ隠れたまで送つてなう。

それから芽萱の音にも、最うお歸かと、待てど  
暮らせど、大方例のにならしやつたのでござら

うわいなう。私がやうな年寄にかけかまひはなけれどもの、何につけても思ひ詰めた、若い人たちの入つて来る處ではないほどに、お前様も二度と来ようとは思はずしやるな。可いかの、可いかの。」と間を措いて、緩く引張つてくゝめるが如くにいふ、媼の言が斷々に幽に聞えて、其の聲の遠くなるまで、桂木は留南木の薫に又恍惚。

優しい暖かさが、身に染みて、心から、草臥れた肌を包むやうな、搔卷の情に半ば眼を閉ぢた。

驚破といへば、射て落さんづ心も失せ、はじめの一念も疾く忘れて、野にありといふ古杜。其の怪を聞かうともせず、目のあたりに車を廻すあからさまな媼の形も、其のまゝ昇ぎ移すやうに筵を彼方へ、小さく遠くなつたやうな思ひがして、其の娘も穢の仔細も、素性も、野の状も、我が身のことさへ、夢を見たら夢に一切知れようと、ねむさに投げ出した心の裡。

却つて爰に人あるが如く、横に寝た肩に袖がかゝつて、胸にひつたりとついた胴抜の、媚かしい下着の襟を、口を結んで熟と見て、噫、我が戀人は他に嫁して、今は世に亡き人となりぬ。

我われも生命いのちも惜をしまねばこそ、恚かる野のにも来きたりしなれ、  
何どうなりとも成なるやうになつて止やめ！

之これも犧にへになつたといふ、あはれな記念かたみの衣こよも哉かな、と  
しきりに果敢はかなさに胸むねがせまつて、思おもはず涙なみだぐむ襟許えりもと  
へ、颯さつと冷つめい風かぜ。

枯野かれのの冷ひえが一幅はぶに細ほそく肩かたの隙すきへ入はつたので、しつ  
かと引寄ひきよせた下着したぎの背せ、綿わたもないのに暖あたく二ふたの腕うでへ  
觸ふれたと思おもふと、足あしを包つんだ裳もすそが揺ゆれて、繪ゑの婦人をんな  
の、片膝かたひざ立てたやうな皺しわが、袷あはせの綺しまなりに出で来て、  
しなやかに美うつくしくなつた。

あなや  
？ 呀あなと見みると、女をんなの倅おもかけ。

眉長く、瞳黒く、色雪の如きに、黒髪の鬢亂れ、  
 前の髪の毛も分るゝばかり鼻筋の通つたのが、寝な  
 がら桂木の顔を仰ぐ、白歯も見えた涙の顔に、得も  
 謂はれぬ笑を含んで、ハツとする胸に、媼が絲を繰  
 る音とゝもに幽に響いて、

「主のあるものですが、一所に死んで下さいません  
 か。」と聲あるにあらざ、無きにあらざ、嘗て我が  
 心に覚えある言を引出すやうに確に聞えた。

耳がぐわツと。

小屋が土臺から一揺揺れたかと覺えて、物凄  
 い音がした。

「姦婦」と一喝、雷の如く鬱し怒れる聲して、外の  
 方に呼ばはるものあり。此の聲柱を動かして、黒燻  
 の壁、其の蓑の下、袷をかけてあつた處、件の巖形  
 の破目より、岸破と？倒しに裡へ倒れて、爐の上へ  
 屏風ぐるみ崩れ込むと、黄に赤に煙が加つて？と砂  
 煙が上つた。

ために、媼の姿が一時消えるやうに見えなくなつ

た時である。

桂木は弾き飛ばされたやうに一間ばかり、筵を彼方へ飛び起きたが、片手に緊乎と美人を抱いたから、寝るうちも放さなかつた銃を取るに違あらず。

兎角の分別も未だ出ぬ前、恐い地震だと思つて、眞蒼になつて、棟を離れて遁れようとする。

門口を塞いだやうに、眼を遮つたのは毒霧で。

彼の野末に一流白旗のやうに靡いて居たのが、横に長く、縦に廣く、ちらと動いたかと思ふと、三里の曠野、眞白な綿で包まれたのは、いま遁げようとするど殆ど咄嗟の間の事。

然も此の霧の中に、野面を蹴かへす蹄の音、九ツならず十ならず、沈んで、どうと、恰も激流地の下より寄せ來る氣勢。

「遁すな。」

「女！」

「男！」

と聲々、ハヤ耳のあたりに聞えたので、又引返して唯壁の崩を見ると、一團の大なる炎の形に破れた中は、おなじ枯野の目も遙に彼方に幾百里といふことを知らず、犇々と羽目を壓して、一體こゝにも五

六十、神か、鬼か、怪しき人物。

朽葉色、灰、鼠、焦茶、たゞこれ黄昏の野の如き、霧の衣を纏うたる、いづれも抜群の巨人である。中に一人眞先かけて、壁の穴を塞いで居たのが、此時、搔潛るやうにして、恐い顔を出した、面の大き、梁の半を蔽うて、血の筋走る金の眼に八夕と桂木を睨めつけた。

思はず後居に腰を突く、膝の上に眞俯伏せ、眞白な兩手を重ねて、わななく鬚の根、頬さへ、あざやかに見ゆる美人の襟を、誰が手ともなく無手と取つて一拉ぎ。

「あれ。」

と叫んだ聲ばかり、引断れたやうに残つて、袷はのけざまにずる／＼と畳の上を引摺らるゝ、腋あけのあたり、ちら／＼と、残しの雪も消え、目も消えて、裾の端が翻へつたと思ふと、倒に裏庭へ引落された。

「男は、」

「男は、」

と七ツ八ツ入亂れてけたましい跽音が駈けめぐ

「叱！」とばかり、此の時覺悟して立たうとした桂木の傍に引添うたのは、再び目に見えた破家の媼であつた、果せるかな、絲は其の手に無かつたのである。恚る時桂木の身は危ふしとこそ豫言したれ、幸に怪しき敵の見出し得ぬは、由ありげな媼が、身を以て桂木を庇ふ所為であらう。

桂木はほつと一息。

「何處へ遁げた。」

「今此處に、」

「其處で見た。」

と魂消ゆる哉、詈り交すわ。

恚いかくてしばらくの間まといふものは、轡くつわを鳴ならす  
 音おと、蹄ひづめの音おと、ものを呼よぶ聲こゑ、叫さけぶ聲こゑ、雑ざつ々として物もの  
 騒さわがしく、此この破家あばらちの庭にはの如ごとき、唯たゞ其處そこばかりを劃わ  
 つて四五本の樹立こたちあり、恚いかる曠野くわうやに停車場ステイションの屋根やねと  
 此この梢こすゑの他ほかには、草くさより高たかく空そらを遮さへぎるものゝない、  
 其その邊へんの混雜こんざつさ、多た人數にんずの踏ふみしだくと見みえて、敷滿しきみ  
 ちたる枯草かれくさ、伏ふし、且かつ立たち、窪くぼみ、又また倒たふれ、しば  
 らくも休やすまぬ間々あひく、目めまぐるしきばかり、靴くつ、草鞋わらんぢ  
 の、樺かはの踵かかと、灰汁はいじるの裏うち、爪尖つまさきを上うへに動うごかすさへ見みえ  
 て、異類いらい異形いぎやうの蝗いなむしども、葉末はすゑを飛とぶかとあやまたるゝ  
 が、一個ひとつも姿すがたは見みえなかつたが、やがて、叱しつ！叱しつ！  
 と相傳あひつたふる。しばらくして、  
 「静しづまれ。」といふのが聞きえると、ひっそりした。  
 枯草かれくさも眞直まつすぐになつて、風死かせしし、そよとも靡なびかぬ上うへ  
 に、あはれにかゝつたのは彼かの胴拔どうぬきの下着したぎである。  
 「其奴そいつく縛くれ。」

「縛くれ、縛くれ。」と二三度ばかり言いをかはしたと思おも  
 ふと、早はや引ひき上げられ、袖そでを背せへ、肩かたが尖とがつて、振ふり  
 の半なかばを前まへへ折をつて伏ふせたと思おもふと、膝ひざのあたりか

ら下へ曲げて搔い込んだ、後に立つた一本の榛の樹に、荊の實の赤き上に、犇々と縛められたのである。

「さあ、言へ、言へ。」

「殿様の御意だ、男を何處へ秘した。」

「さあ、言つちまへ。」

縛られながら戦くばかり。

「そこ退け、踏んでくれう。」と苛てる音調、草を飛々大跨に寝つきつしたと見ると、縞の下着は横ざまに寝た。

艶なる裙がばらりと亂れて、たふれて肩を動かしたが、

「あゝれ。」

「業畜、心に従はぬは許して置く、鐵の室に入れられながら、毛筋ほどの隙間から、言語道斷の不埒を働く、憎い女、さあ、男をいつて一所に死ねえ、言はぬか何うだ。」踏躡る氣勢がすると、袖の縫、衣紋の亂れ、波に揺るゝかと震ふにつれて、霰の如く火花に肖て、からりと飛ぶは、火傷、引敷かれ居る棘を落ちて、血汐のしぶく荊の實。

桂木は拳を握つて石になつた、媼の袖は柔かに渠を蔽うて引添ひ居る。

「殿、殿。」

と呼んで、

「其では謂はうとても謂はれませぬ、些と寛げて遣はさりまし。」

「可し、さあ、何うだ、言へ。何、知らぬ、知らぬ？」

黙れ。

男を慕ふ女の心はいつも男の居所ぢや哩、疾く、口をあけて、さあ、吐かぬか、えゝ、業畜。」

「あツ、」とまた烈しい婦人の悲鳴、此の際には、其の搔くにつれて、榛の木の梢の絶えず動いたのさへ留んだので。

桂木は塞がうと思ふ目も、鈴で撃つたやうになつて瞬も出来ぬのであつた。

稍あつて、大跨の足あとは、衝と逆に退つたが、すツくと立向つた様子があつて、切つて放したやうに、

「打て！」

「殺して、殺して下さいよ、殺して下さいよ。」  
「いづれ殺す、活けては置かぬが、男の居所を謂ふ  
までは、活さぬ、殺さぬ。やあ、手ぬるい、打て。  
答の音が長く續いて在所を語る聲になるまで。」  
「はッ。」

四五人で答へたらしい、荊の實は又頻に飛ぶ、記  
念の衣は左右より、衣紋がはら／＼と寄つては解け、  
と解けほぐれては結ばれ、恰も絲の亂るゝやう、翼裂  
けて天女の衣、紛々として大空より降り来るばかり、  
其の胸の反る時や、紅裏颯と翻り、地に襟のうつむ  
き伏す時、縞はよれ／＼に背を絞つて、上に下に七  
轉八倒。

倂は近く桂木の目の前に、瞳を据ゑた目も塞がず、  
薄紫に變じながら、言はじと誓ふ口を結んで、然も  
惚々と、男の顔を見詰るのがちらついたが、今は恁  
うと、一度踏みこたへてずり外した、裳は長く草に  
煽つて、あはれ、口許の笑も消えんとするに、桂木  
は最うあるにもあられず、片膝屹と立てゝ、銃を搔  
取る、袖を壓へて、

「密と、密と、密と、密と。」

低聲に疊みかけて媪が制した。

譬ひ此の彈丸山を碎いて粉にするまでも、四邊の光景單身で敵し難きを知らぬでないから、桂木は呼吸を引いて、力なく媪の胸に潜んだが。

其時最後の苦痛の絶叫、と見ると、苛まるゝ婦人の下着、樹の枝に届くまで、すつくりと立つたので、我を忘れて突立ち上ると、彼方はハタと又僵れた、今は皮や破れけん、枯草の白き上へ、垂々と血が流れた。

「此處に居る。」と半狂亂、桂木はつゝと出た。

「や、」「や、」と聲をかけ合せると、早や、我が身體は宙に釣られて、庭の土に沈むまで、■とばかり倒れた。

桂木は投落されて横になつたが、死を極めて起返るより先に、これを見たか婦人の念力、袖の折目の正しきまで、下着は起きて、何となく、我を見詰むる風情である。

「静まれ、無體なことを為申す勿れ。」

姿は見えぬが巨人の聲にて、

「客人何も謂はぬ。」

唯御身達のやうなものは、活けて置かぬが夥間の  
掟だ。」

桂木は舌しごまりて、

「……」ものも言はれず。

「斬つ了へ！ 眷屬等。」

きらり／＼と四振の太刀、二刀づゝを斜に組んで、  
彼方の顚と、此方の胸、カチリと鳴つて、ぴたりと  
合せた。

桂木は切尖を咽喉に、劍の峰からあはれなる顔を  
出して、うろ／＼媪を求めたか、其の言に従はず、  
故らに死地に就いたを憎んだか、最う形も見えず、  
推量と多く違はず、家も床も疾に消えて、唯枯野の  
霧の黄昏に、露の命の男女也。目を瞑ると、聲を掛  
け、

「しかし客人、死を惜む者は殺さぬが又掟だ、豫め  
聞かう、主ある者と戀を為遂げるため、死を覺悟  
か。」

稍激しく。

「婦人は？」

「はい。」と呼吸の下で答へたが、頷くやうにして頭を垂れた。

「可し。」

改めて、

「御身は。」

諾と答へようとした、謂ふまでもない、此美人は譬ひ今は世に亡き人にもせよ、正に自分の戀人に似て居るから。

けれども、譬ひ今は世に亡き人にもせよ、正に自分の戀人であればだけれども、可怪、枯野の妖魔が振舞我とゝもに死なんといふもの、恐らく案山子を剥いだ古蓑の、徒に風に煽るに過ぎぬも知れないと思つたから、おもはゆげに頭を掉つた。

「殿、不實な男であります、婦人は覺悟をしましたに、生命を助かりたいとは、あきれ果てた未練者、目の前でずた／＼に婦人を殺して見せつけてくれませう。」

「待て。」

「は。」

「客人が、世を果敢んで居るうちは、我々の自由であるが、一度心を入交へて、恚る處へ來るなどといふ、無分別さへ出さぬに於ては、神佛おはします、父君、母君おはします洛陽の貴公子、むぎとしては却つて冥罰が恐しい。婦人は斬れ！」  
然し客人は丁寧にお歸し申せ。」

「は。」と再び答へると、何か知らず、桂木の兩手を取つて、優しく扶け起したものがあつた、其が身に接した時、濕つた木の葉の薫がした。

腰のあたり、膝のあたり、跪いて塵を拂ひくれる者もあつた。

銃をも、引上げて身に立てかけてよこしたのを、弱々と取つて提げて、胸を抱いて見返ると、縞の膝を此方にずらして、紅の衣の裏ほのかに男を見送つて、分を惜むやうであつた。

桂木は倒れようとしたが、踵をめぐらし、衝と背後向になつた、霧の中から大きな顔を出したのは、遅しい馬で。

これを片手で、かい退けて、それから足を早めたが、霧が包んで、蹄の音、とゞろ／＼と、送るか、追ふか、彼の停車場のあたりまで、四間ばかり間を



【完】